SSK　１９７１年６月１７日第三種郵便物認可（毎月６回５の日・０の日発行）２００８年５月６日発行　ＳＳＫ　増刊通巻第３１８９号

グループホーム

入　居　者　委　員　会　報　告　書

入居者による グループホーム評価基準の 作成に関する研究

「障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会」編

独立行政法人福祉医療機構（高齢者・障害者福祉基金）助成
平成19年度「地域基盤型グループホーム支援方策推進事業」

2008年３月発行

目次

はじめに ・・・（2）

Ⅰ．入居者がグループホーム評価基準をつくる取り組み

1．活動の目的… 私たちは何のために この活動をしたのか？（3）
2．活動の経過… 私たちは何を 行ってきたか ・・・（4）
3．各地の交流会の様子 ・・・（8）
4．まとめ ・・・（20）

Ⅱ．支援者による「入居者が評価基準をつくる取り組み」の考察

1．「これでいい」と「これがいい」 ・・・（26）
2．自分の暮らしを考える場づくり ・・・（30）
3．本人にとっての「交流会」の意味って何だろう？ ・・・（32）
4．大切なのは どれだけ地域で暮らせているかということ ・・・（38）

＜はじめに＞

この研究は、日本グループホーム学会入居者委員として活動する9名の知的障害のある当事者たちによって行われたものです。この報告は、ふたつの部分から構成されています。

第1章は、入居者委員の発言をはじめ、各地の交流会で出会った仲間たちから出された意見を、なるべく本人の言葉のまま、その意図するところを生かすように注意しながらまとめました。まとめる作業自体も、入居者委員と支援者が共同で行いました。

第2章は、入居者委員と共にこの研究事業に取り組んできた支援者によるもので、支援者の目を通して見た「評価基準をつくること」に関する考察です。

本研究事業への取り組みは、入居者委員自身の動機から出発したものではない点で、純粋な本人活動とは言えません。しかし私たち支援者は、本人たちが訴えようとしている大切なことを見逃さないように、ていねいに支援しようと努力しました。

この報告書の全体をとおして、入居者委員と支援者が取り組んできたことと、そこから見えてきた大切なことが皆さんに伝われば幸いです。まず第一に、全国のグループホームで暮らす、もしくは暮らしたいと思っている当事者に読んでほしいです。また、その人たちを支援している人たちにも、ぜひ読んで参考にしていただきたいです。そして、地域に暮らす市民のみなさんがこの報告書を手にし、当事者の思いを知ることで、各地で暮らす一人一人の暮らしを応援してくれる人たちが増えてくれることを願っています。

在原 理恵

Ⅰ．入居者がグループホーム評価基準をつくる取り組み

1. 活動の目的 ･･･ わたしたちは 何のために この活動をしたのか？

私たち、日本グループホーム学会の入居者委員は、次のような目的をもって、各地での交流会を行いました。

①いろいろなグループホームのことを知りたい

・自分のグループホーム と 他のグループホームの違いを 見る

・他のグループホームでは どのような支援がされているのか 知る

・どんなグループホームがあるか、どんな人がいるかを知る

②いろいろな仲間（グループホーム 入居者）の生活を知りたい

・仲間と一緒にうまくやっているか知る

・グループホームに入る前はどこにいたか知る

・仕事のことや 給　料 や家賃を知る

③グループホームだけでなく、支援や地域の 状　況 について知りたい

・病気になったときや グループホームを出なくてはならない時、どんな支援をしてもらえるのか知る

・自分の暮らしとの違い、地域の 特　徴 (物価など)、住みやすいかどうかをみる

・地域と どのように支えあっているのか 知る

④それらを参考にして、 私 たちの暮らしについて 考 えたい

・色々なグループホームの価値観を知り、自分達はどうすればいいか確かめる

・暮らし、生活ってなんだろうってことを 一緒に 考 える

・いつか自分の暮らしやすい グループホームをつくりたい

⑤仲間を増やしたい

・友だちをつくりたい、帰ってきてからもつきあいたい

2. 活動の経過（年間の活動）・・・私たちは何をおこなってきたか

【第一回】　2007年5月20日（日）13：30～

場所：東京都障害者福祉会館

参加者：委員5名・支援者4名

概要：入居者委員・支援者を増やす、今年度活動内容の確認

【第二回】　2007年6月24日（日）13：30～

場所：かながわ県民センター

参加者：委員5名・支援者5名（うち学生1名）

概要：今年度委員構成の確認（自己紹介など）今年度活動内容の確認

【第三回】　2007年7月22日（日）13：30～

場所：ウィリング横浜

参加者：委員10名・支援者6名（うち学生2名）

概要：北海道大会の報告等について、「入居者委員会で活動するにあたって」の確認、委員でない方の参加について

【第四回】　2007年9月2日（日）13：00～

場所：東京都障害者福祉会館

参加者：委員9名・支援者5名

概要：「入居者委員会で活動するにあたって」の再確認

委員会での司会等の役割、自分自身の生活や大切なことを表現する

各地への訪問の際に必要な工夫

静内交流会について

【第五回】　　2007年9月30日（日）13：00～

場所：かながわ県民センター

参加者：委員5名・支援者4名

概要：静内交流会について、山形交流会について

【第六回】　　2007年10月14日（日）13：00～

場所：かながわ県民センター

参加者：委員9名・支援者6名

概要：静内交流会について、山形交流会について

【静内交流会】　2007年10月27日と28日

参加者：委員4名・支援者2名

【第七回】　　2007年11月18日（日）13：00～

場所：かながわ県民センター

参加者：委員9名・支援者5名（うち学生１名）

概要：静内交流会の報告

山形交流会について、大阪交流会について、全国交流会について

委員会まとめ合宿について

【山形交流会】　2007年12月1日と2日

参加者：委員3名・支援者3名

【第八回】　2007年12月9日（日）13：00～

場所：かながわ県民センター

参加者：委員9名・支援者7名（うち学生2名）

概要：山形交流会の報告、大阪交流会について、全国交流会について

まとめ合宿について

【大阪交流会】　2008年1月12日と13日

参加者：委員4名・支援者2名

【第九回】　2008年1月20日（日）13：00～

場所：神奈川近代文学館

参加者：委員9名・支援者6名（うち学生2名）

概要：大阪交流会の報告、全国交流会について、まとめ合宿について

【全国交流会①：各地の方を招いて懇親会】　2008年2月2日（土）18：00～

委員8名・支援者5名（うち学生1名）

各地参加者：8名（うち支援者2名）

【全国交流会②：各地の方との交流会】　2008年2月3日（日）9：00～

場所：かながわ県民センター

委員8名・支援者9名（うち学生1名）

各地参加者：8名（うち支援者2名）

概要：各地の訪問報告

各地からの意見①グループホームいいところ②世話人について③仲間同士、入居者同士の関係④お金の管理⑤よかについて⑥将来どのようにくらしたいか

【まとめ合宿】　2008年3月1日（土）～2日（日）

場所：クロスウェーブ幕張

参加者：委員8名・支援者4名

概要：今年度活動のまとめ、報告書作成に当たって

【第十回】　2008年3月30日（日）13：00～

場所：かながわ県民センター

参加者：委員9名・支援者5名（うち学生1名）

概要：報告書の内容確認、グループホームを入居者が評価することについての考え、来年度、学会長野大会について、来年度について

3. 各地の交流会の様子

＜ 静内地区交流会 ＞

静内(しずない)への訪問(ほうもん)について

＜日にち＞
2007年10月27日、28日

＜訪問先(ほうもんさき)＞
北海道(ほっかいどう)日高郡(ひだかぐん) 新ひだか町(しんひだかちょう) 静内(しずない)

10月27日(土)

＜グループホーム3ヵ所ほうもん＞
①スイートピー、②あじさい(女性だけのホーム)
③どんぐり(男性だけのホーム)
(かんそう)
・広いのに家賃(やちん)がやすい
・冬は暖房費(だんぼうひ)がかかるので大変
・せんたくは外には ほせない(こおってしまう)
・1人ぐらしで ご飯だけを とりにくる人がいる
・困ったときは支援センターの職員に電話する
(センターと携帯電話の番号がはってあった)

10月27日(土)

＜静内生活支援(せいかつしえん)センターをほうもん＞
・自己紹介(じこしょうかい)、次の日のうちあわせ、ロールプレイのれんしゅう
・静内では、世話人を2年に1回交代(こうたい)させるしくみ。支援者はそれがいいと思っているが、入居者は嫌だと思っている人もいる。
・センターはみんなが出入り自由。話がしたいときは電話して、いるか確認していく。

10月27日(土)

＜静内生活支援(せいかつしえん)センターをほうもん＞
(かんそう)
・支援センターの職員が多くてよかった。
・ひろくて、ふんいきが良い。こういう場所があればいいなと思う。・・・貸してくれる物件が必要。
・仕事がえりに行けるようなところが理想的。
・東京の支援センターは、行っても人がいないことが多い。
・茅ヶ崎には グループホームを支援するセンターがない。

支援センターでのようす

10月27日(土):飲み会

＜一次会(いちじかい)＞
養老の滝(ようろうのたき)
(かんそう)
・3150円なのにたくさん食べ物があった。飲み放題。安かった。東京ではあんなに食べられない。
＜二次会(にじかい)＞
ちゃんSバー(カラオケ)
・貸切(かしきり)。1500円で飲み放題。安い。

10月28日（日）：交流会

＜プログラム＞

①意見発表（いけんはっぴょう）4名（自分のすんでいるグループホームのこと、自分のたいけん）

②グループでの話しあい（4つのグループにわかれて、グループホームでのこと、グループホームでのいいところ、いやなところ、好きなこと、趣味（しゅみ）など）

③ロールプレイ（話しあいで出た意見（いけん）をまとめて劇（げき）にして発表（はっぴょう）した）

＜グループでのはなしあい＞

・はなしあいの項目が多すぎたので、3つくらいにしたほうがいい

・はなしがうまくできないグループがあったが、ひとりひとり順番にきけば はなしてくれる

・じぶんからどんどん話す人はすくなかった

・雰囲気がすこし固かったので、最初にゲームなどをするといいかもしれない

（ビンゴゲーム、トランプなど）

意見発表（いけんはっぴょう）のようす

グループでのはなしあい

＜ロールプレイ＞

グループ1：「みんなで ごはんを食べたい」

グループ2：「別（べつ）の入居者へ ちょっかいをだす人への世話人の対応（たいおう）」

グループ3：「ゆっくりしたいのに 話しかけられてできない」

グループ4：「片づけられないひと」「施設は自由がない」

ロールプレイのようす①

ロールプレイのようす②

＜ロールプレイを見てみて、やってみて＞
（かんそう）
・ものがすてられない人の気持ちは分かる
・「ごはんは一緒にたべたい」という時もあると思うけど、１人でたべたい時もある
・帰りがおそくなるときは電話をすればいいのに、しないのかな？したいけど、携帯をもっていない人もいるのかな？
・部屋に入ったら、自分のタイミングで動きたいから、あまりノックしてほしくない。

- 入居者にちょっかいをだす入居者がいたら、世話人や支援者（しえんしゃ）がびっしと言ってほしい。やめないなら、別のグループホームに移動（いどう）したほうがいいのではないか。
- 「携帯電話（けいたいでんわ）をもてない」という入所施設（にゅうしょしせつ）の人の話があったが、入所施設（にゅうしょしせつ）はねる時間がきまっていたり、お酒がのめないとか、カギがたくさんあったり、１人用のテレビがないとか、自由がないという話をきいたことがある。

＜全体（ぜんたい）のかんそう＞
・物価（ぶっか）がやすいのはうらやましい（東京とくらべて家賃（やちん）がやすい）
・ロールプレイで発表したことについて、意見こうかんができなかった
・おだやかでやさしそうな人が多かった（入居者も支援者も）
・静内のグループホームでくらしている人は、支援センターの職員（しょくいん）とのかかわりがふかい
・静内の支援センターのような行きやすい場所があればいいなと思う

おわり です

＜ 山形地区交流会 ＞

山形訪問の報告（2007）

山形県酒田市・・・

12月1日（土）

- 交流会
- 懇親会

12月2日（日）

- ホーム見学

（委員：永田・牧・内田・桐山）

（協力：やまがたの方々）

交流会の報告①（12月1日土曜日PM）

参加者の特徴・・・

- 山形県内の20人が参加。
- 入居前は、入所施設に住んでいた人が多かった。
- おとなしい人が多かった。
- 方言があり、ききとりにくかった。
- おだやかな人が多かった。

交流会の報告②

- 他己紹介・・・声が小さく、少しききとりにくかった。
  慣れていなかったのでスムーズにはいかなかった
- みっつのグループにわかれて、話し合い・・・

（お手伝いしてくださった人：柴田さん・金内さん他）

夜、病気になったらどうするか？
- 寮の電話で職員へ連絡する。施設へ連絡する。

年をとったらどうするか？
- 老人ホームに入る。
- 今のままがいい。
- 家に帰りたい。
- 定年まで仕事をがんばる。

近所（となり組）との関係
- あいさつをする。
- 大宅さんの親族が同居していて、
- その人の友達がホームに遊びに来る。
- つけものをくれる。
- 地域のそうじ。
- ビアガーデンとかでお酒を飲む。
- となりが遠くてわからない。

交流会の報告③

グループホームにはいってよかったこと
- ゆっくりできる。
- 買い物ができる。
- 友達がふえた。
- 話す相手がふえた。
- 広くなった。
- たのしい。

グループホームでこまっていること
- ホームの横が道でトラックの音がうるさい。
- 男女同じホームで、お風呂の順番にこまる。
- ひとりで暮らしたくとも、病気になるとこわい。

施設からホームに移ってかわったこと
- お風呂に毎日入ることが出来るようになった。
- お酒が飲めるようになった。
- 集団ではなく、ひとりで行動出来るようになった。
- 人が少なくて寂しくなった。
- 友達が来るようになった。

人間関係のこと
- 勝手に電気を消す人がいてそれを怒る人がいて、それがうるさい。
- 面白い事があれば話す。

懇親会

宿泊者　17名で、食事をしました。

菅野さん
柴田さん
澁谷さん
（支）

かんぽの郷にて

見学①（12月2日日曜日am）

見学では、泊った参加者と一緒に行った。

・「吹浦荘」の
グループホーム(男性)

男性　5人のホーム。
近所の会社に行っている人がいて、見学した日は、いなかった。
とてもひろく、整理整頓されていた。

見学(けんがく)② （12月2日日曜日am）

・「吹浦荘(ふくらそう)」のグループホーム
（女性）

女性　５人のホーム。
訪問の日、病人がいて、皆で心配していた。
３人の入居者にインタビューをした。
訪問販売の人が来て、入居者が対応した。
休みの日には、みんなで近所のラーメン屋に行くようで、仲がよいと言っていた。
ケンカもたまにすると明るく話してくれた。
久しぶりに昔の支援者に会って、大喜びしていた。

見学②の様子

見学(けんがく)③ （12月2日日曜日am）

・「あらた」の　グループホーム
精神障害のホーム。
男性5人のホーム。

・支援者から説明を受けた。
・「入居者は、ここに入ってからとてもおだやかになった。この家のもつカはすごい」と言っていた。
・もともと民宿だった所を使っている。
・門が大きく、庭も広かった。
・精神科病棟が近くにあった。

見学③の様子

おおさか ち く こうりゅうかい
＜ 大阪地区交流会 ＞

日程

- **日時(にちじ)**:
  2008年1月12日(土)、13日(日)
- **場所(ばしょ)**:
  大阪府社会福祉法人創思苑
  (おおさかふ しゃかいふくしほうじん そうしえん)
  の作業所(さぎょうじょ)とグループホーム
- **参加者**:
  委員：小沼（おぬま）、米田（よねだ）、荒川（あらかわ）
  牧（まき）、永田（ながた）
  支援者：花崎（はなざき）、鈴木（すずき）

12日(土)

- **グループホーム見学(けんがく)**
  3箇所(かしょ)
  ：ほうらい(育成会)、あおぞら、はるみや
- **懇親会(こんしんかい)**

大阪府営住宅(おおさかふえいじゅうたく)にあるグループホームの訪問

結婚カップルの訪問
けっこん　　ほうもん

重度の障害のある人が住むグループホームを訪問

感想（かんそう）

- へやがきれい
- ポスターがはってあった
- おふろ場の段差（だんさ）がたいへん
- 家賃（やちん）が安い
- 結婚しているっていいなぁ

大阪の実行委員との打ち合わせ
じっこういいん　　うちあわせ

懇親会のはじめのあいさつ
こんしんかい

懇親会での自己紹介
こんしんかい　　じこしょうかい

ビンゴゲーム

漫才をしている様子
まんざい　　ようす

感想（かんそう）

- 大阪のひとって明るくていい
- 仲間（なかま）のなかがいい
- 仲間（なかま）と支援者のなかがいい

13日(日)

・交流会(こうりゅうかい)

・観光(大阪城)

交流会でのはじめのあいさつ
こうりゅうかい

交流会の全体の様子
こうりゅうかい　ぜんたい　ようす

グループの話しあいのテーマ

1. なぜグループホームに入ったのか
2. 今のグループホームへの希望
（きぼう）
3. いいところ
4. こまっているところ

グループ1での話し合いの様子
はなしあい　ようす

グループ1での話し合い

グループ2での話し合い

グループ2での話し合い

グループ3の話し合いの様子

ようす

グループ3での話し合い

グループ4での話し合い

グループ4での話し合い

グループ1の報告

ほうこく

グループ2の報告

ほうこく

グループ3の報告

ほうこく

グループ4の報告

ほうこく

①なぜグループホームに入ったか

- 自立(じりつ)するため
- グループホームが良かった
- 親が亡くなった、
- 施設の職員にさそわれて
- ひとりくらしの練習(れんしゅう)がしたかった
- 地域(ちいき)でくらしたかった

②今のグループホームにたいする希望

- 土日(どにち)も泊まれるようにしてほしい
- もっとはなしをきいてほしい
- もっと寝たい
- 世話人(せわにん)がころころ変(か)わるのはやめてほしい
- 買い物に一人(ひとり)で行きたい
- だれでも暮らせることを分かってほしい

③いいところ

- 家事(かじ)がたのしい
- じゆう
- すきな友達(ともだち)にあえる
- かのじょとデートするのがたのしい
- よるおそくまで遊べる
- なかまといっしょにいられる

④こまっているところ

- 障害(しょうがい)のことをわかってもらえない
- 自立支援法(じりつしえんほう)でおかねがたいへん
- おかねの計算(けいさん)がたいへん
- 洗濯物(せんたくもの)をとりこむときに声(こえ)をかけてほしい(視覚障害者の意見)
- もっとヘルパーをつかえるようにしてほしい

余暇の話
よか　はなし

余暇の話
よか　はなし

交流会の目的の説明
こうりゅうかい　もくてき　せつめい

交流会の感想

- けっこんしている人は いいなぁと おもった
- 将来(しょうらい)の夢(ゆめ)を もっていた
- おもい障害(しょうがい)が あっても 楽しくくらしていた

大阪城の前で
おおさかじょう　　まえ

観　光

・交流会では話せないことを、心を打ち解けて話せた。
・仲良くなれた。
・食の力は大きかった(食事をしながら、いろいろ話せた)。

4. まとめ

(1)活動をとおしてわかったこと、みんなに伝えたいこと

①（施設とくらべて）グループホームのいいところ … グループホームにはこんないいところがある。こういう良さを大事にしたい！増やしていきたい！

＜こまった時に相談したり、助けてくれる人がいる…グループホームの仲間やいつもつきあっている友だち、世話人や支援センターの人など＞

・ともだちがいる。

・ともだちが いっぱいできて よかった。

・なかま の はなしを きいてあげる。

・できるひとが できないひとを てつだってあげる。

・ヘルパーに そうじを たのめなくなったけど、みんながてつだってくれる。

・むずかしいことは たすけてもらう。こまったら せわにんに そうだんできる。

＜自分の部屋がある…ゆっくり自分のすきなことができる、自分のものがおける、テレビも自由に見られる＞

・自分の部屋で ゆっくりできる。

・自分の部屋で すきなことが できる。

・自分のすきなものをおける。（れいぞうこ ぽっと など）

・自分の部屋がもてる。自分のすきなようにできる。施設は相部屋でけんかになる。

・テレビもおそくまで みていられる。（施設では 9時までだった。）

・テレビを何時まででもみていられる。（次の日 じぶんが朝おきられればいい。）

・テレビをみるのは 自由。音には気をつける。

・部屋に自分のテレビがあって みられるのがうれしい。

＜買い物や外出に自由に行ける＞

・買い物にすぐ行ける。（ようふく、おべんとう）　まいにち 買い物にいける。

・自分で９９ショップに行ったり、コンビニに行ったり、自転車で出かけたり、たまに自転車で会社に行ったりするのが、すきなようにできて いい。家では　買いもののことなど 親と けんか になる。

・施設では 買い物は 職員と いっしょだった。今はひとりで いろんなところに かいものに いける。

・自由に外出できる。

・お金のつかい方をおぼえた。 考えて買い物できるようになった。

・自由に買い物できる。自由に ともだちと あえる。

＜行動の自由がある＞

・自由に友だちと会える

・施設は 外にあまり あそびにいけない。今は ともだちと おそくまで あそべる。

・けっこんができる。施設では恋愛禁止だった。

・もんげんが なくて自由がある

＜少ない人数で暮らせる＞

・毎日おふろに入れる。

・施設では おおぜい だったが、小人数でしずか。

・施設ではおふろや洗濯機のとりあいになった。

＜食事のこと＞

・ごはんを好きなじかんに 何人かでたべられる。

・ごはんをいっしょに食べるときもあるし、ひとりで食べることもできる、自由。

・食事の じゅんび を してもらえる。

・あったかいものは あったかいうちに 食べられる。

・栄養を きちんと かんがえて つくってくれる。

② 世話人（グループホームの職員、寮母など）について … 一番身近な世話人さんと信頼関係をつくるのは時間がかかる。だからすぐにやめてほしくない。でも世話人さんだけじゃなく、他の人たちも私たちを支えてほしい。

＜世話人がかわることについて＞

・なれた世話人が かわるのは こまる（お金をあずけたりしているし）、不安定になる。

・いい世話人だったら、かわらないほうがいい。

・かわったほうがいいという いけんは、たいおうがわるい世話人の場合だとおもう。

・かわるなら はやく知らせてほしい。

＜世話人に相談できるか、または、だれに相談するか＞

・ひとによって 相談する 相手がちがう。

・世話人にそうだんする場合もあるし、支援センターの しょくいん に相談する ばあいもあるし、本人かつどうの支援者や、作業所、親や仲間に相談する場合もある

・自分のことをわかってくれる支援者が 1人は いてほしい。

・こまったときに 相談できる人が いない場合もある。

＜世話人との関係が悪くなったときどうするか＞

・世話人の上のたちばの人にそうだんする。

・ホームをかわる。

・やめてもらう。

・きげんをとる。

・はなしあう。

・オンブズマンや苦情処理委員会にはなす。

③ 将来どのように暮らしたいか … 一人暮らしや結婚しても支援してほしいし、お金の問題で実際には難しい。高齢者になってもこのまま暮らし続けたいと希望すれば、それが可能であってほしい。

＜希望＞

・彼氏と 結婚して いっしょに くらしたい。

・ずっと同じグループホームでくらしていきたい。ひとりぐらしをしたかったこともあったけど、体調がわるくなったらこまるので。

・結婚はしたいと思う。ひとりぐらしもしたいけど、たいへんらしいので、しなくてもいいかなと思う。

・ひとりぐらし。結婚やつきあいについては、できれば結婚したい。としをとったらのことは、わからない。

・ひとりぐらししたい。相談もひつようだけど。

＜課題＞

・高齢になったらグループホームを出なければならないから、体調がよくて作業所にもかよえれば、グループホームにいられる。（グループホームでは昼間の対応がないから）

・介護がひつようになったり、病気が長びいたら グループホームでくらせないことが不安。

・ひとりぐらしがしたくても、現実的には お金がたりない。

・いつでも相談にのってくれる人がいる支援センターを増やすべき。

・第三者委員会のような相談できる場所、人がほしい。

・グループホームのことだけではなく、いろんなことの相談ができ、ひつようなところにつなげてくれるところがほしい。

・ひとりぐらしや結婚しても、ヘルパーなど支援をじゅうぶんつかえるようにしてほしい。

④グループホームで困っていること … 住みたいグループホームを選べないし、世話人はすぐやめてしまう。自分の暮らしとみんなでの暮らしのバランスが難しい。お金の不安、相談できない不安もある。

＜選べない・足りない＞

・グループホームをえらべない。

・グループホームとして使える建物をえらべない。

・入りたい時に グループホームにすぐ入れない。

＜世話人＞

・世話人になる人が少ない、すぐやめてしまう。

・世話人がすぐにかわる、慣れたときにかわるのは困る。

＜入居者どうし・みんなで暮らす＞

・入居者どうし で まったく知りあっていないのはこまる。

・となりの部屋の音や声がきこえてしまう・・・話し合いがたいせつ。

・行きたくなくても 入居者みんなで 外出するように 言う世話人がいる。

・おふろや洗面所、トイレの数が足りない。おふろの順番で問題になることもある。

・干渉されすぎるのは困る。

＜収入が少ない、お金のこと＞

・家賃が高い、家賃補助がないところが多い。

・家賃補助があっても収入制限があってつかえない。

＜相談できる人がいない＞

・困ったときに相談できる人がいない。

(2)これからやりたいこと

① 地域での生活を よくしていくための　かつどうをしたい

・改善する 方法 をかんがえ、行動するべき。

・関係者だけではなく、企業や一般の人、 政治家、マスコミにうったえていく、障害者の地域での生活の現実を知ってほしい。

・委員の地元での活動につなげていくことができないか。

・入居者委員の住んでいるグループホームを訪問したい。

・具体的に困っていること の かいけつ方法 をみつける とりくみをすべき。

② グループホームのルールについて考えたい

・規則ではなく、社会で暮らしていくために必要な、人へのはいりょについて。

・地域で暮らしていくためには、自由ばかりではなく、責任も必要。

Ⅱ．支援者による「入居者が評価基準をつくる取り組み」の考察

1.「これでいい」と「これがいい」

川瀬　悦

評価基準を作るうえで、各項目を分けて話し合ってきました。しかし、もしかしたら、「今の生活が好きかどうか、今の自分が好きかどうか」の確認が、一番はじめに必要だったのかもしれないと、気付きます。

評価基準を作るうえで委員会で生活の一部一部を切り取って、それについて満足か不満足か、あるいはどんな状況か、を各地で話し合うことにしました。その時に、みなで思っていたことは、「これでいい（ここでいい）」ではなく「これがいい（ここがいい）」という言葉を求めて、そして、「これでいい」と妥協（？）している人たちの意見を聞いたり、「これがいい」と満足している人たちの意見を聞いて話し合ってきました。委員会の中でも、自分自身が項目についてどうなのかを確認し合いました。その項目に対しての答えは、多くの委員が、前者の「これでいい」であったように記憶しています。つまり、その項目に対して、少しの妥協があったように思います。（以下、「食事」の項目についてのみを例にあげます。他にも、お金、世話人、部屋、地域、人間関係等ありました。

『妥協の理由』

例えば、食事の項目で「これでいい」と答えたA さん（私は A さんとホームで過ごす事が多々あります）に具体的な内容で「食事の時間は自分の好きな時間にとれますか？」と聞いてみました。すると、「とれる」と答えましたが、ホームの生活では、そうではない場合があります（「今はいらない」とよく発言します）。つまり、委員会の中で答えた「これでいい」の「これで」には、妥協が含まれていたのではないでしょうか？

「これでいい」と答えた人の各地での内容（A さん含む）

（「これがいや」と答えた人の意見は含まず）

- 世話人の勤務時間にあわせなければならない
- 嫌いな人とも一緒に食べなければならない
- 食べたいものがでない
- 準備の当番制はやめてほしい
- 他にどんな場合があるのかわからない（知らない）※
- それでいいけど、違う方がいいけど、うまく言えない※

（※これには、本人への情報や本人の経験の不足、表現が苦手な場合があります）

『今が好きです、大事にしている事があります』

でも、食事の項目について「これでいい」と答えたA さんに、今の生活（生活全般のこと）（今の暮らしが好きかどうか）を聞くとはっきりと「これがいい」と答えました。理由を聞いてゆくと、漠然と「今が好きだから」でした。また、私の訪問した地域の方々は「これでいい」と答えた方でも、みなさん活き活きとした表情でした。

他の理由

- 好きな人（入居者・職員）がいるから
- 職場をがんばっているから
- 相談できるから

食事だけをとれば、妥協の「これでいい」かもしれませんが、他の充実したことがあれば、当然、食事については「これでいい」になります。そう気付いた時に、まず始めに毎回毎回「今の生活が好きかどうか」を聞いてから、始めればよかったなと思います。項目ごとに分けると、何を基準にすればいいか、わからないことは

きっとたくさんあります。私の訪問した地域の方々は、「これでいい」と答えた方も他の方もみな、表情が活き活きしており、項目だけの問いでは、私自身、本人たちが何を伝えたいのか、本人たちから何を聞き出せばいいのかだんだんわからなくなってゆきました。

生活は、ひとつひとつの項目が、組み合わさっているものではなく、影響しあって成り立っているものですので、すべての項目が「これがいい」にならなくても、今、何を自分が大切にしているかを自分で気付くことが、人の暮らしの中で大切なことだと思います。

≪委員会や訪問は、きっかけのひとつ≫

このひとつひとつの項目をみなで意見を出し合って、また、各地の人たちの話を聞くことによって、「食事についてはいいかわるいか」を自分と置き換えて、考えるきっかけになったことはたしかです。そして、「食事」にまつわることには、色んな意見があり、色んな見方があると言うことも考えることができました。また、項目ごとに話し合ったことで、ホームのよいところや世話人についての重要性や、将来のことの課題が見えてきました（第一章第四節参照）。そこからの自分にとっての色々な大切を発見できたと考えます。

≪最後に・・・≫

色々な人の話や意見を聞くことで、目標が本人の中で明確になった場合もあります。「一人暮らしがしたい」「結婚がしたい」など、自分を満足させようとする目標が生まれました。それに、「これでいい」がその人の中に存在することで、「これがいい」（何かを）を求めている証拠です。そのことを大切にする本人自身（支援者も含め）になってゆけるとよいです。この先、できあがる評価基準があるのなら…、

項目に分かれていても、その人一人一人の暮らしの潤い（「今の生活っていいよ」「今の自分が好き」と自信を持って言えるような暮らし）をつかめてゆけることがよいと考えます。また、そんな潤いを発見できるための「評価基準」をみなさんと一緒に考えてゆけるとよいと考えます。

2. 自分の暮らしを 考 える場づくり

蔵本　七絵

わたしが入居者委員会に参加させていただいて２年になります。みなさんがグループホームでの暮らしや、自分の生活に大切なもの、支援者について話し合っているのを聞くと、いつもグループホームの支援者の一人として考えさせられる（ときには深く反省・・・）することばかりです。

日本各地で交流会をしたり、グループホームを訪問しましたね。次に訪問する場所の交流会の内容を前回の交流会をふりかえりながら、

「□□の方が話しやすいのではないか？、○○をするとうちとけやすいじゃないか？、◇◇はわかりにくいんじゃないか？」

などなど、毎回入居者委員で熱く熱く意見を出し合っていました。「たくさん意見が出るように」と、まだ会っていない各地の入居者を思う意見がいくつもあり、ハっとさせられました。

委員のみなさんはこの入居者委員会や、このほかにも本人活動に参加されて、自分の考えや思いを伝える機会はあると思いますが、きっとそれでももの足りないと感じているのではないでしょうか？

グループホームで暮らしている人の中には、言いたくても言えない人、これまで自分の思いを伝えてもそれをきちんと聞いてもらう機会がないことが続いて、言っても意味がないと無意識に思っていて言えない人も多いのではないかと

思います。

ある交流会で「困っていることはなにか？」と話し合いましたが「困っていることはない」という意見がほとんどでした。その時はそれで流れてしまいましたが、わたしは「本当にそうかな」という思いでいっぱいでした。わたしが働いているグループホームの入居者の方の日々のおしゃべりや顔の表情からは、「もっと○○してほしいのに」というメッセージをたくさん感じるからです。それでもいざきいてみると「ない」となってしまいます。

これはききかたの悪さもあるかもしれませんが、ふだんなにげなく思っていることが自分の暮らしやグループホームを考えるうえで大切なことだと、気付けている人が少ないからかもしれません。（もしかしたら委員自身も）。

委員のみなさんが各地のグループホームの人との交流をして、自分の暮らしを考える場を作って、「その気持ちわかるよ」「それは大変だよね」など話しをきいていくことで、少しずつでも障害のある人たちが『何かを言える』という機会をつくっていっていると思います。

本当にいつも熱い入居者委員会。

わたしも、これからもそんなみなさんのパワーを、もらい続けたいなと思います。

3. 本人にとっての「交流会」の意味って何だろう？

～「グループホームを評価する」のではなく、「暮らしについて一緒に考える」ということ

鈴木　良

1. わたしは、どのようにして「交流会」に参加することになったのか

わたしは、昨年の9月ごろからグループホーム学会の入居者委員会に支援者としてかかわっていますが、本人のはなす「ことば」や「ふるまい」からあらためて気づかされることがたくさんありました。ここでは、本人が「交流会」をどのようにおこなってきたのかということを考えることで、本人にとっての「交流会」の意味についてわたしが気づいたことをお話しします。

グループホーム学会の入居者委員会は、現在、本人がグループホームの評価基準をつくり、全国のグループホームの生活をより良いものにするために活動しているとわたしは聞きました。そして、「交流会」はそのための具体的な活動であると。わたしは大学でグループホームの生活をしらべてきたので、この活動にはとても関心をもちました。「第三者評価制度」や「モニター制度」などグループホームを評価する組織は増えていますが、「本人が評価する」ということはあまり聞いたことがありません。「本人が自分の生活を評価するってどういうことなんだろう？」、「本人が作る評価基準は、ほかのものとどのように違うんだろう？」などといろいろな思いをめぐらせながら、この活動に参加することになりました。

2. 「グループホームを評価する」ことではなく、「暮らしについて一緒に考える」ということ

ところが参加するにつれて、本人は入居者委員会の活動をそれぞれの関心におうじて意味づけているのではないかとわたしは思いはじめました。たとえば、ある日

の話しあいで「交流会の目的ってなんだと思いますか？」という支援者の問いかけにたいして、本人は次のように語っていました。

「自分のグループホームとほかのグループホームの違いを知りたい(見たい)」
「仕事や給料がいくらなのかを知りたい」
「一緒に住んでいる人とうまくやっているのかを知りたい」
「夜間の対応を知りたい」
「何が楽しいのかを知りたい」
「友達になりたい」
「暮らしって何だろうかと一緒に考えたい」など

これらの目的はまとめると、グループホームを含めた「暮らし」全体について、①「生活の違いを知ること」、②「一緒に考えること」、③「仲間を作ること」になるでしょう。本人から「評価」という言葉が出なかったことや、「グループホーム」ではなく「暮らし」という言葉をつかう人がいることにわたしはとても興味をもちました。

なぜ、本人はこのように語ったのでしょうか。まだグループホームを「評価する」ために活動するという意識が低いからなのでしょうか。あるいは、自分のグループホームの生活に慣れてしまっているからなのでしょうか。わたしはそういうことではなく、本人の「素朴な」答えにとても重要な意味があるのではないかと考えています。つまり、本人が大切にしているのは、「グループホームを評価する」ということではなく、「暮らし」全体について、①仲間との「違いを理解し」、②どのような「暮らし」がより良いものなのかを「一緒に考え」、③「仲間とつながる」ことなのではないでしょうか。

たとえば、ある日の定例会で、「全国交流会のために、グループホーム学会の入居者委員が話し合いのテーマを考える必要があるんじゃないですかね？」と支援者が話したあと、ある入居者委員が次のように話しました。

「やっぱり向こうの人たち(各地区の人たち)からもどういうことを話し合いたいのかを、テーマを出してもらったほうがいいんじゃないですか。やっぱりこちら(入居者委員)だけではなくって。双方向が大事なんですから！」

ここには、暮らしを一方的に「評価する」のではなく、「一緒に考える」という発想が示されています。「第三者評価制度」にしろ、「モニター制度」にしろ、たしかに入居者の生活をより良いものにするために活動しています。しかし、「評価する」ということは、①「同じ」基準で人の生活を評価し、②何がより良い暮らしなのかが「あらかじめ決まっていて」、③評価する人と評価される人という「上下関係をつくる」(「つながり」をこわす)ことになります。また、これらの評価制度は入所施設やグループホームなど現在の障害者福祉制度によってつくられた住居を評価しようとしていて、「ひとり暮らし」や「結婚生活」、さらには「余暇」や「仲間との交流」などを評価の対象にしていません。グループホーム学会が「本人中心のグループホームの評価基準の作成」を目標にしたことは新しい試みでしたが、「グループホームの評価」に限定すればこれまでの評価制度と変わらないものになってしまいます。本人の「思い」は、「グループホームを評価する」ということではなく、「暮らしについて一緒に考える」ということにあったのではないかと考えられます。ここには、グループホームを超えた「暮らし」という発想や、「仲間とのつながり」という連帯の発想があります。

3.「暮らしの違い」と「共通に大事にしていること」

ただし注意しなければならないのは、「暮らしについて一緒に考える」ということは、暮らしの違いを理解することで終わらないということです。「一緒に考える」ことを通して、本人は暮らしの違いを理解しながらも、より良い暮らしのイメージをもっています。たとえば、つぎに紹介するエピソードは、ある定例会で「となりに住んでいる人と話す機会がないので、もっと交流があったほうがいいと思う」というある本人の意見に関して支援者がたずねたときのエピソードです。

支援者A：○○さん(本人①)、これは他の入居者とつながりがあったほうがいいということですか？

本人 A：うーん、一緒に住んでいる人と飲みに行ったりしたいかなぁ。やっぱりコミュニケーションが大事なんで。

本人 B：わたしは一緒に住んでいる人とは旅行に行くことがあるかなぁ。旅行に行けばあまり話したことがない人とも話せるし。そうじゃないと、どんな人が分からないし。

支援者B：○○さん(本人③)のグループホームはどうですか？

本人 C：僕んところは、ホーム長によって違うから。まえのホーム長は行きたくなくても行かなければならないことがあったから。なんか、それだと、施設みたいになっちゃうし。

支援者C：でも、○○さん(本人③)はまえに、誕生会を開いてくれてとっても良かったって言っていましたよね？

本人 C：うん、誕生会は楽しいけど。

本人 A：それがコミュニケーションじゃないですか。僕が言った飲み会と誕生会とではそんなに違わない。

支援者B：やっぱり誕生会やって楽しい場合があるんじゃない？

本人D：でも誕生会やって嫌な人もいるじゃない(このとき、本人Dさんは両手でバッテンのポーズをとりながら話していました)。人によって違うことがあるから。

本人A：人によってそれぞれということですよね。

支援者C：ほどほどのつきあいが必要というか。

本人A：ほどほどの距離が大事。

ここでは、同じグループホームで生活する入居者とのつきあい方をめぐって、さまざまな意見がだされています。本人Aさんにとっては「飲み会」をとおして、本人Bさんにとっては「旅行」をとおして、本人Cさんにとっては「誕生会」をとおして、ほかの入居者と交流したいと考えています。しかし、本人Bさんにとっては「ほかの入居者と一緒に旅行に行くことは苦手」であり、本人Dさんにとっては「誕生会は苦手」ということが語られています。しかし、こうした様々な意見の違いをだしたあとに、「ほどほどの距離が大事」という点で多くの本人は納得しています。

このように、人の暮らしはそれぞれの関心や好みにおうじて「違い」がありながらも、「共通に大事にしていること」があるということなのでしょう。しかし、ほかの入居者にむかって、「あなたは『ほどほどの距離』でほかの入居者とつきあうことができていますか？」とたずねられても、たずねられた人はどう答えていいか戸惑ってしまいます。あるいは、「あなたは、ほかの入居者と誕生会をしたり旅行に行ったりしていますか」と細かくたずねられても、誕生会は嫌だけど旅行に行きたい人や旅行は嫌だけど誕生会をしたい人、さらにほかの方法で入居者とかかわりをもちたい人は、どう答えたらいいのか分からなくなるでしょう。「ほどほどの

距離」をその入居者がどのように考えているかということは、このエピソードのように、やはりその人と実際に会って、その人の生活にそくしながら、「一緒に話し合う」ことによってでしか分からないということになります。

ですから、こまかい「評価項目」をつくり、それがちゃんとなされているのか、あるいは、なさていないのかということを「評価する」のではなく、そこで生活している人に出会い、「ほかの入居者とのつきあいはどうしていますか」といった漠然とした問いかけをしながら「一緒に話し合い、考える」という方法が重要だということなのでしょう。こうした「入居者同士の話し合い」をとおして、たとえば「ほどほどの距離をとれるようにするためにはどうしたらいいのだろう？」ということを本人が自分たちの生活にそくして自分たちの言葉で、具体的に考えることができるようになるのでしょう。

4. 新しい「評価」のかたち

このように考えると、この報告書で示されているこまかい評価項目も重要ですが、それよりも重要なのは評価項目をつくる過程のなかで、本人が「暮らしについて仲間と一緒に考える」という活動そのものにあったと考えられます。ここには、これまでの「第三者評価制度」や「モニター制度」にはない新しい「評価」のありかたが示されているのです。わたしはこうした本人たちの活動そのものから「人の生活を評価するってどういうことなんだろう？」とか、「暮らしってなんだろう？」とあらためて考えさせられました。これからは、わたし自身の「暮らし」についても入居者委員会の本人たちや、わたしの身近にいる仲間と「一緒に考える」ことができればいいなぁと思っているところです。

4. 大切なのは　どれだけ地域で暮らせているかということ

～入居者委員会は「グループホーム評価基準の作成」にどう取り組んだか

花崎三千子

入居者委員が「入居者によるグループホーム評価基準の作成」と言う仕事に取り組んで２年がすぎました。ここでは　支援者としてこの仕事に関わるなかで、私が感じたこと、わかったことを報告します。

１．入居者委員と一緒に仕事をするのは　私にとって楽しいことでした。それはこの活動の中で「交流して分かり合う」ことがとても大切で、楽しいということが実感できたからです。

それは例えば次のようなことです。

①会議中の発言の内容やようすから、入居者委員がそれぞれが自分の生活の中で何を考え、どう過ごしているかが　わかったこと。

②一緒に各地のグループホームをたずね、それぞれのグループホームがとても違うこと、その違いは、グループホームのある地域の特性や、支援のあり方からくることが　わかったこと。

③各地の入居者や支援者と知り合いになれたこと。

④移動中に、ゆっくり　一人ひとりと話が出来たこと。

グループホームの評価基準は、グループホームの理念や制度がわかっているだけではつくれません。いろいろなグループホームを実際に訪ねて入居者と知り合い、気持ちがわかることが大切です。だから、入居者委員は、「入居者によるグループホーム評価基準の作成」という課題にたいして、グループホームの訪問と交流を提案したのです。一緒に行動して、私にもその重要性がとてもよくわか

りました。

２．私は　入居者委員会の支援は難しい　と思うことがありました。それは、私が本人活動のなかで大切にされていることに　こだわったからです。

それは次のようなことです。

①会議中に　話の中身が議題からずれてしまうことがあり、どのように口を挟んでよいか迷うことがあった。しかし　ずれているように見えても、ゆっくり聞いていると、議題について話していることがわかることが　多かった。

②一人が長くしゃべって　他の人がいらいらすることがあり、アドバイスするのが難しかった。

③話の中身について私自身の考えを言いたいとき、私の発言が全体の方向を決めてしまうと困ると思い、遠慮することがあった。しかし実際には、委員はそれぞれにしっかり考え、その人流に発言していたので　私が心配することはなかった。

④会議中に　感情的になったり、個人攻撃のようになって、他の人が気まずくなる場面があり、どう調整するか迷った。しかし、ほとんどの場合は話に熱が入りすぎただけで、互いに注意したり、別の話題に移ることで落ち着いた。

⑤限られた時間中に、沢山のことを話し合う必要がある時、司会する入居者委員をせきたてたり、司会を横取りすることがあった。司会者と打ち合わせするなど、事前の準備が不足していた。

実はこうしたことは　本人活動の支援者がいつも悩むことです。実際にはこの問題は本人活動の成熟の中で自然に解決に向かいます。入居者委員も活動を積み重ねる中で、自分で考え、発言し、人の意見に耳を傾け、アドバイスしあう力を

備えてきているので、ほとんどの場合私の取りこし苦労だったのです。

けれども重要なことがあります。それは、今入居者委員会が取り組んでいるテーマが、「くらしの場」「暮らしのあり方」というとても個人的な問題だということです。グループホームは複数の人が暮らす場ではあっても、「自分の家」です。そこには元気で積極的な自分も、落ち込んでだらしない自分もいるのです。だからグループホームのことを問題にする場合は、そこで暮らす人の感性がどこまでも尊重されなければなりません。本人らしさ、本人流が大事なのです。

知的障害のある人は長い間「保護と従属」と言う関係を周りから強いられてきました。理念や制度が変わっても根強く続くこの関係を破ったのは，６０年代に北欧や北米で起こり、９０年代に日本でも始まった「本人活動」とよばれる本人中心の新しい運動です。グループホームという最も個人的で個別性の強い問題に取り組むためには　「本人活動」の力が重要なのです。私が入居者委員会の支援をする中で、本人活動の原則にこだわるのは　そのためです。

３．入居者委員会の活動の中で「グループホーム評価基準の作成」と言う目的は　どうなったのでしょうか？

では次に　入居者委員会は　グループホームの「評価基準」をどうつくたのか検討してみましょう。評価基準と言う言葉から思い浮かぶのは、例えば　大項目、中項目、小項目いう欄に、沢山の項目が書いてある何ページにもわたる表です。私もはじめはそういうイメージをもちました。１年目に入居者委員会は交流会の中で集めた仲間の声をもとに話し合い「グループホームにとって大事なこと」をまとめました。そこには「食事のこと」「世話人のこと」「入居者同士のこと」「建物・部屋・場所」「地域との関係」の５つの大きな柱がたてられていました。２年目はさらに柱が増え、中項目や小項目も検討されて、「評価基準」らしくなるかもし

れない。私はそう期待しました。

年度初めに２年目の活動計画がたてられました。３箇所の地方訪問と、地方代表をまねく全国交流会、それらをまとめるための合宿。形は１年目と同じでしたが、計画は１年目より綿密でした。話したいテーマを先方に伝へて考えを深めておいてもらう（大阪）、ロールプレイをして問題を実感する（静内）などです。その経過と結果は、第１章の「入居者がグループホーム評価基準をつくる取り組み」に報告されています。

そのなかで入居者委員は、自分たちの活動目的を次の５つにまとめました。

①いろいろなグループホームのことを知りたい

②いろいろな仲間の生活を知りたい

③グループホームだけでなく、支援や地域の状況につて知りたい

④それらを参考にして　私たちの暮らしについて考えたい

⑤仲間を増やしたい

入居者委員会での議論は熱を帯びていました。自分からどんどん発言する人、長すぎてブーイングを受ける人、促されておもむろに口を開く人、ポツリと言う人。発言のスタイルに違いはありますが、どの人も良く考えながら自分のことを鮮明に語っていました。でもそれは「グループホームの評価基準の作成」という、冷静で客観的な響きを持つ作業とは　かなり異なっているように私には見えました。

グループホームについて　こういうことが話されました。「ゆっくり自分の好きなことが出来る」「次の朝仕事に遅れないように自分で起きれば、何時に寝てもいい」「ヘルパーが来られなくなったけれど、みんなが手伝ってくれる」「友達がいる」「お金の使い方を覚えた」「世話人が代わるのは困る」「駄目な世話人なら代わった方がいい」「自分のことをわかってくれる人が一人はほしい」などなど。「将来どのよう

に暮らしたいか」についても時間をかけ熱心に語られました。

話の範囲は「グループホームホームにとって大事なこと」をとっくに超えていました。委員たちは自分たちで立てた目標通り、「仲間の生活を知り、それらを参考にして自分たちの暮らしについて考えた」のです。

4.「入居者によるグループホーム評価基準の作成」という目的は達成できないのでしょうか？

では、入居者委員会は「入居者によるグループホーム評価基準の作成」という耳新しく魅力的な仕事を放棄してしまったのでしょうか。あるとき私は「支援者がもっとはっきり入居者委員の仕事を教えるべきだ」と助言されました。そこで私は、「この委員会は　これからどんどん増えるグループホームで暮らす仲間の生活のレベルアップのために活動している」と改めて説明しました。入居者委員はそのことを十分理解していました。しかし、それは普通にいわれる評価基準の作成作業とは直接結びついてこないのです。問題はどこにあるのでしょう？この仕事は入居者委員にとって難しすぎるのでしょうか？

その答えは入居者委員会がつくった報告の中にあります。そこには　自分たちがやったのは、「他のグループホームの違いを見」「どのような支援がなされているか知り」「自分たちがどうやったらよいか確かめる」「暮らし、生活って何だろうってことを一緒に考える」ことだと書かれています。自分の暮らしについて思いめぐらした、仲間と一緒にそれをした　と言うのです。

つまり　グループホームの生活は　そこで暮らす人にとっては　外から物差しを当てて計るものではなく、自分たちで悩み、考え、工夫してつくるものだと言うのです。この感覚は　彼らが「グループホームで暮らす障害者」の枠をとっくに超えた一人の生活者であることを　はっきり示しています。入居者委員のYさんは「僕

たちにとって大切なことはどれだけ地域で暮らせているかということだ」といいました。ここには　グループホームという制度や枠の中に閉じ込められるのではなく、自分の意思で地域で暮らす姿があります。「グループホームの評価」がこうした認識の上に立って行われたとき　はじめて意味を持つと　彼らは言っているのです。

入居者委員会はもう一つ重要な指摘をしています。それは　生活の中で一番問題なのは「関係性」だと言うことです。「なれた世話人が代わるのは困る」「自分のことをよくわかってくれて　それを尊重してほしい」「入居者は一人ひとり違うのだから、それぞれの入居者とのよい距離をとってほしい」「入居者同士の相性が大切」。その関係性の中で、彼らは明らかに一方の主体なのです。住まわせられる対象ではなく　暮らす主体なのです。双方向で常に変化する関係性として自分と周りを捉え、その中で自分を主張するこの姿勢は、ともすれば固定的で一方的になりがちな「評価基準」という思考そのものに対する、重要な指摘と言えるでしょう。

５．来年度の活動に向けて

入居者委員会は来年度どんな活動をするのでしょうか？私が当初イメージした多くの項目の作成には向かわないでしょう。入居者委員は来年度も自分の生き方を模索し、仲間の暮らしを気遣い、それについて話し合うでしょう。仲間を増やして行くでしょう。一方「話し合うだけでは駄目だ、働きかけ、変えなければ」と言う言葉が合宿の中で出ています。この中で彼らは「グループホームに住むのは誰か」という基本的な問題を提示するのかもしれません。第3者評価委員会やモニタリング会議など、グループホームを評価する立場の人たちと話し合いを進めることも考えられます。その上でどんな答案を書きあげるのか、私は入居者委員会の来年度の活動を　とても楽しみしみにしています。

日本グループホーム学会 入居者委員・支援者

＜入居者委員＞

阿部八重（東京都内のグループホーム）

荒川たかし（下宿屋）

内田雄二（下宿屋）

小沼一弥（パルマ 99）

桐山朋佳（下宿屋）

M.T（東京都内のグループホーム）

永田　孝（さくらの家）

牧　正一（グループホーム来夢）

米田光晴（下宿屋）

＜支援者＞

在原理恵（神奈川県立保健福祉大学）

川瀬 悦（下宿屋）

蔵本七絵（さくらの家）

鈴木 良

花崎三千子（社会福祉法人草の実会）

＜学生サポーター＞

廣田 光（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校）

横田実香（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校）

障害のある人と
援助者でつくる

日本グループホーム学会　のごあんない

あなたは今
だれと どこで
どんなふうに
暮らしていますか？
その暮らしに 満足ですか？
困っていることは
ありませんか？
将来は どんな暮らしが
したいですか？

こんなことを
話し合い 勉強し
自分にあった暮らしを
実現させるために
ともに
考えていきましょう。

日本グループホーム学会って、どんな会？

誰でも自分の意思にもとづいて、地域で暮らせる権利をもっています。
障害の種別や程度にかかわりなく、どんな人でも快適に暮らせる場所が必要です。
障害のある人、援助者、家族、研究者、行政で仕事をする人など、
幅広い人が集まってこの問題を研究し、その成果を分け合い、
暮らしやすいグループホームをつくっていくことがこの会の目的です。

どんな活動をするの？

1，季刊グループホームを発行します（年4回、春夏秋冬に発行）
2，全国の会員が集まって研究大会などを開きます。
3，議会や行政に意見を出し、グループホームをよくしていきます。
　マスコミなどを活用して社会にもアピールします。
4，会員同士の情報交換（メーリングリストに参加できます）
5，入居者(利用者)の意見をグループホームに反映するための活動を応援します。
6，現場スタッフ、運営者などの相談にのり、研修をお手伝いします。

会員になるのはどんな人

会の目的に賛同し、一緒に活動しようと思う人は誰でも会員になれます。
会員になる人は、団体名ではなく、個人名で登録します。
年会費3,000円を支払うと、年4回「季刊グループホーム」という雑誌が届きます。

学会というと、かたい感じがしますが？

学会といっても、これは新しいタイプの学会、学者の集まりではありません。
グループホームで暮らす人を中心にいろいろな立場、職業の人がかかわり、
新しい暮らしのあり方を考えてゆく学会です。

この学会にとって、あなたの意見がとても大切です。

研　修

研修を実施しませんか?

　こんなに多くの研修が必要なの?それほど大変な仕事なの?そんな時間とれないよ!そのような悲鳴が聞こえてきそうです。研修はしたいけど、いつやれっていうの?　グループホームから離れられない!　研修に参加したくても代わりの人がいない!法人が研修の必要性をわかってくれない!そのような現実があることは十分承知しています。

　暮らしを支えるという事の難しさや大変さを、国や多くの人達はわかっていないのではないでしょうか。そのせいか、暮らしを支える仕事は社会的には評価されていません。人の人生にとって暮らしはきわめて重要だと思うのですけれど。

　暮らしを支えるという仕事への社会の認識を変えていくためにも、まず研修の必要性を周りの人にわかってもらう事から始めましょう。

大切な地域での横の繋がり?

　何人かで研修といっても、世話人は私一人しかいない、そのような小規模な法人もあります。法人の中での研修ももちろん必要ですが、大法人なら別として、小規模な法人で多様な研修を準備するのはなかなか困難です。そこで地域で法人の枠を超えて横に繋がって研修をしてみたらいかがでしょうか。自分の法人では当たり前の事が、別の法人からみたら、びっくりなどという事もあります。横に繋がることにより、いろいろな可能性が広がります。その地域の相談支援の事業所が横の繋がりを応援してくれるかもしれません。

世話人やサービス管理責任者の皆さんを支える仕組みはなかなかできそうもありません。ですから地域で支え合う事が必要なのです。

1泊の研修も

　全国各地で世話人間の交流も兼ねた1泊の研修が行われています。お互いに大変さ、難しさ、つらさがわかり合える世話人同士ですから、話しはつきません。夜遅くまで、熱心な話し合いが続けられています。

　1泊の研修もいいし、集まりやすい、昼間だけの研修もいい。地域の実情に合わせて研修を実施してみませんか?

グループホーム学会にご相談ください

　研修の内容や、講師の派遣など、是非、グループホーム学会にご相談ください。できる限り地域の取り組みを応援します。

障害のある人と援助者でつくる
日本グループホーム学会

事務局連絡先

入会、退会、住所変更、各種問い合わせ、メーリングリスト登録申し込み、メーリングリストのアドレス変更については、下記までお願いします。

【学会事務局】
ＴＥＬ/ＦＡＸ:０４２－３４４－１８８９
Ｅ－ｍａｉｌ:info-gh-gakkai@shiraume.ac.jp
住所:〒187-8570　小平市小川町１－８３０
白梅学園短期大学　堀江研究室
<入会申し込み郵送先>
郵送での入会申し込みや問い合わせの場合は、
〒238-8522 横須賀市平成町1-10-1
神奈川県立保健福祉大学 在原 宛

電話対応は常駐しておりませんので、できるだけＦＡＸか郵送、電子メールでご連絡ください。

入会･退会の流れ

入会申し込みの際には、「日本グループホーム学会入会希望」と明記の上、氏名、郵便番号、住所、所属、電話番号、ＦＡＸ番号、メールアドレスを記入して事務局までお申し込みください。

なお、会員専用メーリングリストへの登録も希望する方は、「メーリングリスト登録希望」と明記してください。（会員登録せずにメーリングリストのみ登録することはできません。）

新規入会、退会の手続きは、登録されるまでに申し込みから1～２ヶ月かかることもありますので、ご了承ください。

入会･退会手続きが完了した旨の通知はいたしません。会費振込みの際の郵便振替受領書を領収書に代えさせて頂きますので、保存をお願いします。入会登録された後に、季刊誌「季刊グループホーム」をお送りしますので、お待ちくださいますようお願いします。どの時期の入会でも年会費は同じですが、当該年度に発行した機関誌のバックナンバーで在庫があるものを全てお送りします。

なお、会員は個人のみです。団体名での会員登録はできません。

会費の納入についてのお願い

年会費3,000円は、郵便局の下記の口座にお振り込みくださいますようお願いいたします。また、障害をお持ちのご本人の会費は1000円です。この「本人会費」は、学会における本人活動等への参加促進のために特別に設定しており、障害のある当事者のみを対象としておりますのでご注意ください。
なお、団体名での振り込みでは、納入者が確定できませんので、必ず会員登録している個人名で振り込んでくださいますようお願いします。（団体名での会員登録はできません。）

振替口座名　日本グループホーム学会
記号番号　　００１３０－３－４６３０９４

寄付についても上記の口座にて常時受け付けております。
(通信欄に寄付○○円と明記してください)

障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会　入会申込書

日付:　　年　　月　　日

氏　名			
住　所	〒		
電　話		FAX	
E－mail	会員専用メーリングリストに登録希望　□する ・ □しない		
所　属			
会員区分	一般　・　障害のある本人		

(　　)年度から入会します

SSK 1971年6月17日第三種郵便物認可（毎月6回5の日・0の日発行）2008年5月6日発行 SSK 増刊通巻第3189号 定価800円
発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砧6-26-21 特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

独立行政法人福祉医療機構（高齢者・障害者福祉基金）助成
平成19年度「地域基盤型グループホーム支援方策推進事業」入居者委員会報告書

入居者によるグループホーム評価基準の作成に関する研究
入居者委員会報告書

発行日　2008年3月1日
編集　障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会
研究代表　室津滋樹（障害のある人と援助者でつくる日本グループホーム学会代表）
事務局　〒187-8570　東京都小平市小川町1-830　白梅学園大学　堀江研究室
TEL／FAX　042-344-1889　E-mail＜info-gh-gakkai@shiraume.ac.jp＞